

令和5年1月11日

京口門だより No. 111

新しい年を迎え本年も皆様の健康に関わってまいりたいと考えておりますので宜しく願いいたします。毎回毎回新型コロナウイルス感染症の話題ですが、全国的に増加し亡くられる方も多いと伝えられています。私自身の身近にも感染者が増えており、先日も発熱外来をおこなっていた親戚のドクターが新型コロナに罹り大変でしたが、漢方薬を服用して軽快したようでした。何度も申し上げますが、この新しい感染症に漢方薬が有効であることが証明されてきています。「年来たる如何なる年ぞと頭上ぐ」(天野莫秋子)

よく一般に漢方薬は長く吞んでゆっくり効いてくると言われがちですが、今日の新型コロナやインフルエンザあるいは普通感冒でも、ゆっくり効いてくるのではとても役に立ちません。漢方医学の治療原則に「逐機(ちくき)」と「持重(じじゅう)」という考え方があります。やや難しい言葉ですが、「逐機」とは病気やその症状が変化する時は、その病気や症状に応じて使う薬を変えてゆくということです。新型コロナやインフルエンザのようなウィルス感染症では、時々刻々と病状が変化してゆきます。初めは頭痛、発熱、寒気などの症状から始まりますが、しばらくすると咽が痛い、咳が出る、体がだるく、食欲もないなどのような変転をきたします。そんな変化を無視して風邪には葛根湯などと決めて治療するようでは漢方治療ではありません。時間の経過と起きている症候によって、治療法を変えてゆかねばなりません。病原ウィルスも人体も生きているのですから、病原と人体の戦いのなかで、多様な変化が起こってくることをよく見極めなくてはなりません。「逐機」とはそのようなやり方を言っています。このことは漢方医療だけの考え方ばかりではありません。事業やスポーツでも変化に気づいて対処しなければ失敗につながります。

一方「持重」は病気や症状があまり変化しないような慢性的な病気には、泰然として一つの治療を続けてゆくという考えです。これぞという治療法をじっくりと観察しながら継続し積み重ねてゆくということです。漫然と同じ治療を続けることとは違います。慢性の胃腸疾患、腎臓病、肝臓病などでは「持重」という姿勢ひつようです。

漢方治療というものはそうした柔軟性をもったものと言えます。

